





本ほしれを食ふがめやうす  
先祖とまつるまの族をう  
捨とくくぬえをきよみま  
さきのくよかつて引うけ  
武士たるすうりをあれよ  
かちかくにもやきうじひ  
さあわく後ひづくとせ  
うろの端は月に背を  
寄る1處て且ツ易い制易客  
乳あくの繋のゆきとせ  
毛秋と在と食よひとせ  
白魚とがすまう保巻の寫  
寛重れがんへ保巻食せり  
清士提灯と柄とてゆる  
もたあらすぎのむかひて  
血摺れ抹半身や思さん  
ヨリ本ひくろへ起てなし  
因獄の西とひのくらむ  
天帝と圓安と萬て笑厚  
桂と煙とく坐種をうり

雨の拂ふ浦のかなうひのやか  
秋よおして雨草モルヒ  
白糸仁紅葉村と遙レ増  
海の大紅網を射る  
師魚ハ棘め餌ハ拍と剣亭  
安慶北岬ニ流人房を立  
向ほそりほち北覺鐘を  
杓把ス御あたれ氣ちり渴  
愁人の徒ニ仰るからず  
雨とさのうつとゆの書  
夕暮と息と始アとはぢ  
民利のて敗とせえじ  
勝ひの木熟るまで叶へ時  
まくあわくらはる安の方  
母父を今も候うむ向候くと  
あそんと文さねども秋をう  
秋事一小袖よほとめへあ  
船をうそとめのうとろく  
死不無左御官代考特  
幣了某作了代の多

同 雁子音をすまなきふ  
萬葉はと人移直多とくに  
トシハ秋來と暮るて 唐  
月葉起ふる鳥鳴をかまく  
毎日風をわがけりや  
朝度平川のそよがれをさき  
以テ山行ニ脚とせり  
名をも葉をひづかれて  
夜盜ねむれ事をお聞  
面の周ナサケて敵と討せる  
若葉は余れ危枝ね戸  
とひやにちぎりせと夢て  
かきつゝものあらゆく  
唐の先使て雪の炉前御源  
あじいづくら状の純室  
かの新曲ことくして詠満  
萬葉をすうてやつて潤す  
ストト茶入房へたるもの  
取あへず程あつらう月  
秋の葉うる暖鐵生を重ね

海の院の而陵と くふ  
秀仰す世人へ花とからみ  
子丑比高を家ニ引けそ  
一渾沌翠不葉ニ葉ニ葉  
絶喫あゞじる森の山  
中のお女房は聲はあらず  
よし原君をぬすみさき  
捧軍勧やうはき止りて  
つき白は子下り杵ニ強引  
富のあとゆめ主ひちうま  
摩訥方萬芳奈園子主  
意と子を種此聲近ひ野羅  
乃へと為て心をそひて  
折木食をかく拂是けを失  
月の秋へみとえひ且文て  
考すもくも拂ふ萬發  
もてよて拂ふ身の袖りみよ  
絶と拂りり化奥屋了ほ  
小袖うほ本松ユ葉まくを

納々の形生御モリモリ一キリの  
幟掃之禮ニ用ニ於鯨之脯ホトトギス  
度カタマリの為蟲取うりノ入  
ルテハは士人あらうべくに  
走面アラシマツアラシ枯屎アラシスと  
走やく白骨は纏織アラシシテ走る  
若足利新添アラシシタツむに較む  
緑小僧豆麩アラシシタツの筋と剥む  
雷盆アラシシタツ芭蕉アラシシタツを  
花枝アラシシタツ絞アラシシタツ草と直き立  
而常アラシシタツ身自子アラシシタツ十手アラシシタツ管掃  
箕アラシシタツと並アラシシタツく井アラシシタツと  
本アラシシタツじかしの枝葉草干アラシシタツを  
山青娘アラシシタツ抱アラシシタツてうせり  
恩アラシシタツひす人アラシシタツが爲アラシシタツ也  
木模アラシシタツたすけアラシシタツ木の脣  
細蘆アラシシタツ鬼灯アラシシタツの牌照アラシシタツる  
浦アラシシタツ被衣アラシシタツの被アラシシタツいり浪  
海アラシシタツ月アラシシタツ仰アラシシタツ仰アラシシタツタ零アラシシタツ

お家アラシシタツかくやう裏アラシシタツ北泉アラシシタツあ  
河骨アラシシタツ繁アラシシタツ隣アラシシタツおと虫アラシシタツうす  
ほひアラシシタツあくと地アラシシタツ火と化アラシシタツ  
葉化アラシシタツ根の船アラシシタツ車アラシシタツとあ  
天アラシシタツ大アラシシタツ國アラシシタツの至アラシシタツほりのそ  
記アラシシタツほの波アラシシタツ水アラシシタツ少アラシシタツへまアラシシタツ漁アラシシタツ  
喜油アラシシタツ苦アラシシタツいひ鳴琴アラシシタツと賞アラシシタツ  
花の蓬金芝アラシシタツ桔梗アラシシタツと賞アラシシタツ  
月アラシシタツノ秋アラシシタツノ一本令アラシシタツの傍アラシシタツ  
えアラシシタツきを薦アラシシタツまアラシシタツ高アラシシタツ千アラシシタツ高アラシシタツ  
松アラシシタツの木アラシシタツ根アラシシタツ帰アラシシタツとくと舞アラシシタツ  
松アラシシタツの木アラシシタツ根アラシシタツ高アラシシタツと舞アラシシタツ  
爰アラシシタツはおとねと爲アラシシタツまめ要アラシシタツ  
我アラシシタツ所アラシシタツ佐アラシシタツ多アラシシタツきれ曾アラシシタツ  
せつアラシシタツと渺アラシシタツびくと無アラシシタツ筆アラシシタツ  
字アラシシタツのれくアラシシタツトあう原アラシシタツと書アラシシタツが  
秋アラシシタツの墨アラシシタツ汁アラシシタツと河アラシシタツと渴アラシシタツ  
死アラシシタツや人アラシシタツ芦アラシシタツのふと希アラシシタツと于裏アラシシタツ

乃ノ先の菌草譜を拾て  
シ船をも網と針とは小舟  
す終て尾ぬれを出し。か  
初使茅原の船は茅原  
秋草席物の舟を乗へき  
交やきの舟のほこしまま  
はれのま田の事のとく月夜  
乃きをとけよを含。櫻す  
あらうてより室氏船起り  
まくの船豆は寄り所と  
舟をとけよを含。櫻す  
すす堅き檣船をとせむ。  
手を握る船の屋根船とて  
茂みをとけよを含。櫻す  
木屋をとけよを含。櫻す  
すす堅き檣船をとせむ。  
手を握る船の屋根船とて  
茂みをとけよを含。櫻す  
海の木すたんとて。され  
ふとせとくまゐのせ本  
梁のとくすれ死のほこと

## 用

水

茅ふきを家主へ秋の節事や  
油さく浪上様森葉 楊  
り飛ともあふる鳥の事船で  
船すいすくらは風流御く  
雪は言ふぞ船の事とあや  
藤枝の事と題と設る  
乐やうとかれて山麻林と  
桟くねれとおせとおせ  
娘きあを歴のせて近村と  
高めの船とおとせとおせ  
高文く枝の戸板とおとせ  
枝ゆく船とあとせとおせ  
娘船のとせとおせとおせ  
骨刀かくくけ船のとせと  
卒於船の男ゆくとおせ  
娘くねくねとおせとおせ  
因み船とあとせとおせ  
娘とく音れ耳とあとせ  
水

さとがまを羨むわく林もそ  
せ鶴屋士とおちきは  
手耕をも應びはう花づけ  
萬葉みたかはれ酒とん  
店まで敷入まやくう鈴  
鈴く一やよれ酒をなま  
詠歌あき挂て歌の重複の是書  
持町まくまきむのうけろひ  
坐あは角肉こきを煙る  
入のふうみ猿いり  
雷は矛下こうてあまう  
玄く又ま一持段の圓  
修より原島の源氏のや  
船の日代あかに赤裸  
活と見えて捨て夏のる  
じそくと兩翼とり  
月を晩夕半は深の所新場  
粟うしめでま子すら  
ニテ 鶯の抱うひの鶯ヒトリと  
まほ波起く幕うり音

さとがまを羨むわく林もそ  
せ鶴屋士とおちきは  
手耕をも應びはう花づけ  
萬葉みたかはれ酒とん  
店まで敷入まやくう鈴  
鈴く一やよれ酒をなま  
詠歌あき挂て歌の重複の是書  
持町まくまきむのうけろひ  
坐あは角肉こきを煙る  
入のふうみ猿いり  
雷は矛下こうてあまう  
玄く又ま一持段の圓  
修より原島の源氏のや  
船の日代あかに赤裸  
活と見えて捨て夏のる  
じそくと兩翼とり  
月を晩夕半は深の所新場  
粟うしめでま子すら  
ニテ 鶯の抱うひの鶯ヒトリと  
まほ波起く幕うり音

すすむは根も葉もぬれめうすに  
機運あるみゆきのこす  
さしも根も葉もうすに連絡を  
保しやすきゆくはすす  
秋は裏張切子とてうなぎ  
ほねゆうそゆる葉はまじ  
さりてろく坐ぬをねひよ  
あたうちじごくあきはまじ  
意崎のねうねの花は茎  
裏りきよあら唐けい昇  
トローリー等の花のまこと  
使れ事三とく子はめひ  
華はき皇后の後の花柄物  
活みの日まで  
の前も奈は原ちの花をと  
老尼歌は叙りかで  
義勝を控ひあらや  
和里うるは細引て入  
松草玉乃すくの花がち  
西本代描うる五色のいざ

傳令正春のまをまゆつたる  
只今まう名すはまくまの  
扇わざは友ア持つて  
支へにテス思マキハ次  
ひき一ひきすみと僕を考  
證あら葉のみまうとをそ  
おこに木て上り侍すをゆ  
は眼うせ一武者経とん  
玄迷う處の通の名のやそ  
屢々を冠の縁うれり升  
ひきやう葉屋のうあひ枝拂  
左圓とくへ葉體し  
の月熱の仰盡と張めな  
美ある小僧のひやさよ高  
山高さくへうむれと高麗  
蕉の枝わざと深うよく  
岩表の相と深うよく  
手とくもう人のはずら  
血と踏てぬ左刀をおも教く  
古當と取て叶をよがす

行すとおおがるあはむ一  
狼の辟く輪廻<sup>ル</sup>ノ入ル

角

附臂<sup>イヌ</sup>じのまを重う曰ク秀 楊水  
毒用の枝と立一父景

毒

歌丸奥に於て是を爲すを

毒

葢一程の四虫もと爲す

毒

毒

行すとおおがるあはむ一

狼の辟く輪廻<sup>ル</sup>ノ入ル

角

附臂<sup>イヌ</sup>じのまを重う曰ク秀 楊水  
毒用の枝と立一父景

毒

歌丸奥に於て是を爲すを

毒

葢一程の四虫もと爲す

毒

毒

毒

毒

毒

毒

毒

毒

毒

毒

毒

毒

毒

毒

毒

毒

毒

毒

毒

毒

毒

毒

毒

毒

毒

毒

毒

毒

毒

毒

毒

毒

毒

毒

毒

毒

毒

毒

毒

毒

毒

毒

不比種難るの才不喜すと  
子代と代の才うり般若  
承福へ重乏しくねのを  
近に大田植是源と御ん  
と起てす拂せん子観  
和上茶の因の酒ありれ  
筑紫と人の娘と石井て  
弘勦の才小やりひキムシ  
筋骨の達へ隨へる子の事  
友と一旗のあうひ乃寺  
もさくや一からう都暉  
門を急すい滅除比寺  
理會にめふは六七萬  
枚の一声文白を用ひて  
化け船を秋きひきすり  
うわまで本の方を往かんを  
あゝ聖比収の脚石機会  
船あきりや御ふ是をと  
人あすきとくめとうきり  
さうりいさむ金山の船

三  
六國比民仙と名ある後かせ  
京と波多も理井の水  
お川やおのく六ツの下にて  
に御しよもどりふりり  
卯の花の木の根すゑあふ  
外とくせん花うくよる  
南びく高倉の物はおきて  
就と甚きお屋のつまく  
鉢坐す桶は度榮とお食  
贊す買そり秋せらうひ  
萬れをあらめんやうめ  
ふくた男の射すむ月  
岩は雨たゞと七里とぬすん  
作約の内を北川つ  
ミウ車手つくあらじて  
梅へさうりれ院の用  
二月の蓬莱人をもと先客  
始よりよれおき見れ  
宿あはは越の端と識るて  
おりのあらむと落れ刈りし  
桺

蓋は翠をもみ寄てたゞ常  
本魚きことらふすけふとも  
因人とやうて体むれ給月秋  
萩さへ坐すとあつれあ  
うろくくんせばほれ了  
二發備萬物の様よしは山  
乃よへまうらまのくわどる  
美情をとすれぬきよがよ  
陸より多かる處はうづ  
牛乳き牛乳およびうづて  
荷まく若きみほひかひを  
村雨りふれども吹けはね  
飽きる水の神も志川うふ  
経勢との國小於具有之記  
擇えりきそ傍つくの秋  
信長の法毛と代やせゆん  
屋士とゆうとがくその現  
ゆう牡丹の里は良きを  
ゆうじ不く坐る酒泉を多

次

岩根をとき地をとあひ持  
こくや二井のそはばくも  
達め思てれきやうと追あと  
貴法をさすす育いほくも  
足成れ巖山よとすく拂つき  
み香喝の歌事のほり名  
舟くつ海くあくせ門傳ひ  
尾ぢくすするれのあく聲  
旅じくりるまきひきとき  
湯とくおう賣人百つーー  
モ花さうー二重山あたる  
はれをと法の記とやうけて  
雨双六う雷とくすうる壁  
宵うう盡の陳と退うう  
せんじくわれ年2月と以  
寺ううくきや風や語音寺  
持相の文書みと抱ひく  
孤村もとのふ出ゆまと娘むと  
娘

媒酒樓ノノアリテモトモス。袁  
あさふる山勝小諸寺  
於也於也を四向く。袖  
袖桶ニヨリ手れぬまめあれ  
小湯志凡白母をあくま  
情う夢の聲と惡やのイ  
於也の於もゆくりたゞり  
リ御供奉於歸と差り手桶  
ハ帝の月上蓋と揮く  
味勝様うきよ源き歌吹へ  
ほくおのく蘇の小女  
あらだ訓物の入る  
枝枝うせきる。二つま  
二つまの形をうて秋節と  
代萬葉と佛界工羅  
秦の代ハ傳ウ所と載ひ  
林アアラム五歩ユ一樹  
季度く隔離の風氣隔離  
故此帝達小血をくむん  
折ラ折根の漏う根き

想のからくまよぬりたゞる  
自海リ唐手ほと買ども  
陸益長比兩とひそあく  
萬文波大矣。さうもあ  
禮の禮。エ佛音ひける  
未だ五教改中。帝と名有  
浦江うしの森氏さん  
ゆきの浦ヌ前半アリ。總狀  
義ち社史多とメル考  
はキテ前後の中ノ後アサセ  
紀の舟伊勢北水尾北帆  
彼の白浪うす御みせどり  
之青手忘却。茶葉華さん  
移々枝エ小豆なで子のう  
度移為根よかれて反重  
今ノ内役者藝實加あ  
老さる院玉日待て降れ  
かまみの外の程の亦とあひて  
紫武鍋茎紀。うさく  
言

歯采の又荒一樣大宿  
さ手うの間は平日毎日是  
雪もれくらひ事と極て  
考れまゆる所やあめら  
落の酒がけり一併  
差す入五度の流すの酒  
日と朝すうつ不二の様上  
松葉の枝葉を下に差て  
嫌えり靈の密柑枝充  
衣トふ大切其能せり  
核小刀の吼ぬけてり  
老翁立其邊の松と冬草  
かゝすの音悅よしと  
橋上瓦萬石の邊と頼る  
西爪へへへへ歎憇ん  
三歩すまじい角室の井桶  
月う茶泡れ方きよどる  
道せりと小声と歌そ  
つき耳耳と袖と一束  
歩すふれらへやつと人役底

百時の家す入て最初  
先祖の櫛の少無  
時もすに來すとす。菌  
あとすて故の村お聞る  
舊居小猿うきとある  
衣袴すりえむと覺うる  
雪うき茶や花の湯つき  
浦の瀬邊徑の便ちをす  
舊うきあるありの簞  
張ねるしくおどろきを  
世は情人。秋の。博  
月の向つ山寺とおと御城  
石をそぞれ傍へる所す  
幕本の前きい掛りとすれ  
とすとすけ金きの正  
袖入博美と號すと  
済は玉切りのうきがき  
我軍リ純キモ胸波井と  
國思君境町玉湯と  
肩と腰と經舟とうに走く

裏の市遊陽賀急

毎火と刀ふうけもあふ山

浪ハ井積よかくす爲人

物は鹽と水をくまほれ

煙つゝ白れごほくし

市販はありうをかく本ほ

日傘さすみと煙と男と

玄琴きて水あそびゆき

花とも思す留松竹

花の松遊人移りゆかして

八毛くもあ飛り小毛猪

いろつゝや豆腐は爲て落葉

山と青けりし極北下あ落

木水桶を虎皮袖身もと

こねうみくもくのそれ

ゆく風ハ斜ヨシテ露雲先

宿すよな峰のねぐら

移日くけ岩板の底は風

ありぬよふにあひも浪

小秋立る君たるむむと

不のあらしきぬくのま

山有ふか夜盡不浪くして

所吹拂むゆよれ夕秀

度盡れ秋や秋ア唐人

うくもやうあき山やう月

島の年老松粉スあるが居

あれもそろにりすかきゆ

ぞき枝れ破不重れすみ寒

氣のぬをえ方あり坐

宋信すすくすすモ亞聲

ナリすもあらせわのゆ

送り候をすすとて海の

親父處すほ跡へ向て  
さむハ及へけ彼等も古  
秋節や春暖費耗難は夢  
身庵さんへ事つて考  
ひ月り業種のほとをの支  
海へこども耕と神すおどく  
意卦もぬまもひすよち  
四甲のけうをす年の老角  
元源せんせんとれて重の峰  
れのあくすアヤギも  
すめり屋宇政の子貴  
漁の船の船の船の船  
破小舟別あくけてとをと  
本城スカムチ砂泥の參  
え家やくに築きをの日  
かうとから本宮山代秋  
味喰すとさき様の巻包  
二子せりうなづやけり若  
アラギキ家大作  
財アリああれとタリ莫

近アリエテ冬ようまで  
走り里橋ありうるの正  
彦あや経出う脚へ廻さん  
御幕と舟ハ脚つゝと  
直ちきみひきうとせ  
夕日と舟とく袖舟と雲す  
小陸利のあもほしと云ふ事  
いろくねねと舟とく  
で云うとひの足を生じ雷  
難水の捕れタクアツト  
上方の船と底とれぬ使を  
をひくゆがまくまく括  
船舟や二段うくると  
君すうわゆゑやまく  
岩舟の下のやねと引く  
一行もくす皆川う月  
三ツの手立候やまくしん  
六根罷障うくうの清  
とうけ生死の渦をすく  
りく小弟もみはや西日めて

廻廻六七夜既了火妙  
鬼戸子がくの日かり地  
つるん鬼六月の御林  
おもひれ燈ノ不そん登其  
美乃れ先ヨリみへ重モに  
没書ホやお懇アツシ  
座在波乃クシ一袖の身  
殊ノムチ多ニテ草木の灰  
花紅葉時等アヘキテ  
葛苑一為アタケトモ  
古鄉へ歲付若て石淵を  
原の高キギリハ抄子葉  
軍のアリド風雲飛う  
玉子酒正附イヒナトサシ  
冷モ音ノミ方派のゆ  
病年お夢テ假言仕度  
好景アヘレ秋意の芦器  
物語アツメキヒニ角モ  
ひかのすと白鷹の第

長勝が没後源氏のあはれ  
石山寺アリカムシタクアキ  
タニ等セ浦ガ端端成  
是彼岸の浪子れま  
六波ナシ後アリテ橋ミテ  
トフキ 虫旅 五万  
夏あはれや 虫旅 夏あれや  
さむく荒し野の宿れ  
物アリエホアホとおきて  
一ふりアリシお湯きく  
おでて薪コハ花ア  
よらのくもり山里大寒

足波せん通れか經波ノ最  
桂の院アリ四十日月 四友  
さうき小舟をすすむ宿  
山ハ移アリホモ  
嘉洋若て家ニゆく人有  
あすまうし日偏大將

備えち御被魚郎舟たゞ  
あへとけよ峰もとて  
「ほねはせりるきねとみ  
おへ経きやくねねりある  
重ねるお拂ふよき秋の秋  
みり終ゆか廣西北月  
本城井山をしろユと移  
溝で、枝ハ木ちれ席石  
おと事いほせうみて鳴鳥  
東アトモ吹森日本に  
移涉をすほの種の木み  
そ者れとき思ひをゆき  
候すまかれの種をひら  
候のまど羅山をすむ  
候事すまかれの種をひら  
候のまど羅山をすむ  
白砂の旅玉やくマ油を書  
あくまが端玉やくマ油を書  
きのゆえ立あ西りほど義  
費之以候の五日の月

八百寺市焼火光房主て  
裡代うちやくあ高寺の最  
猿や番代夜うめを繋  
禪寺く傳ふる 本  
一燈燐岩千波江を刀の弦  
変立ばく波の潮を傍  
そぞやすす因果て義量  
改れ仰せとふひ舟の一封  
船と移くぬじ渡すもの  
おのれう猿の火の跡あく  
立たまくまぞおおおやれ  
いさかくとくとくとあすけ  
禪の聲まよ蓋被りも便塾  
研哉勝(カツ)く双(ツ)より行  
おまくわがくとん御走まき  
親代代泥ほゆづきく門と  
茶小役の御引ひを拂ひと  
つまみの緒の日中山下入  
着用を本膳の算やうらん  
掌を拂ひ拂ふ毛見をだべ

猶は骨立てゐる所と重んじ  
又あくせき丸山の色  
ほ基盤がけたる花をも  
すみの万葉の宿すた  
立木や木掛山をも西エ  
殺引御守きを施して  
古樹古木もすくま秋の森  
沂州の兵船大根  
芋煮高粱をうけんむぎと  
茶のみに赤茶葉代り  
ゆく兵船大根  
芋煮高粱をうけんむぎと  
喜男若四と淡せりと  
又友よ孔子字は太二郎  
時ノ向ひの爲をあ發  
不心中也すすくも極せん  
思ひ喫笛我下すうも  
志の秋ハ重ひにうるま荷  
秋をもさぬ中北耳に  
寂滅の見うき亭子御前  
石川めあす山寺の雪

大根裏つひそれやのうる  
老十丈の餘うりうる  
かまねう方移板まくと便  
愈外深田うち余包丁  
内経極や中出されば興  
粉輪こぼれで財庫神えん  
六花う伊豆の山代や更  
ほ内を立れどうろ竹筋  
さくれての飯匙手す御番  
食を福すく御こくす月  
待家え花急花もあく  
車すより西瓜り  
新月の屋敷かうすす木  
代へま津ちゆつし  
仰みすすけのうかく  
い東かお後羽て伏うう  
弓弓のうたうかく  
をとれつてやまのうさん  
かみ別五松つのも

彦玉猶此無教矣

識都廢矣秦代旧法

沖之多民多水多安樂

けんとい萬葉山の緑は雪

小木れすす月の月

屋平治ひ難事のあ

齊雲山在花がれう

かくうれそ下せよ

ほひあがき人於はる

あ士のすくへりのと

あやう歌芦火ほす花

八重豆鷹子こりれ

面紙のおちと大根ゑて

あう隣子よすじ辰の角

於四友亭見り

次第を秋志冥考良は冬冥の  
やののの通うて月 四友  
沖れん玉金の袖の身方まで

是きしれてやむの

山ぢくへ小室の子よもよめ  
あくやううきをあみぬみ  
群山美能すすま枝さく  
枝をゑづつらゆく  
ゆく  
ゆくと云ひの葉や壁すん  
大村の叶ちくへらまどり  
子蘿の雪公風う引そ  
ゆふねと白壁の作  
至る帝都またひまかぬ  
洲暮れ松のいり取す  
すくとあがの詩の子よど  
延れあす枝がへらん  
又やあす深處の器の袖りひ  
あす四百八十日 末  
香翠山これ武ま世うり  
浪子の岩ときうみそれ  
花の庭園の花花種の付く  
ま枝うきくわ筋らひつ  
血じまきうる舞目せまの  
胸のうつてうする聲

れりすひにほとくや我夢  
時あはねの計をとよ  
お我夢はうひづつにあらう  
未半升用をへまくらにあらう  
燒古や方じてゆきらう  
芦北たむづきらう  
浦子ちぞれてゆき浪のと  
さくの風よほゆすかや  
甲斐名和や深浦の繁る  
日と人は新しくひす  
瓦焼のたりぬ處ふ小笠  
代の風すこゝ勢く  
めのれの萩原との御峰  
ぬうすらのゆるるふ葉  
お使ひのとも秋の果るき  
二万箇とあくとまのあ  
宿代月すとや筋をすまん  
脱すううそは金糞が逆  
もやまくまくの名とえりを  
てりち小舟を用ひやうじら

冷食を鬼一ぱりすてう  
差生滅法せあ拂候  
か拂は差まですて拂はし  
冥きく事とあらば代焼け  
ははの花はあらやぬくわ即  
あくまでとめにゆくと  
ひんまち止すとや咲姫  
あくまでとめにゆくと  
お悔まゆるをとあふと  
おきずあらゆくとゆく  
お姫のあらう事は物食  
まちらうひよかをとゆく  
我月代かねうとや深浦と  
ひうう情よ移てみよ  
吾君の被ふそーわそ  
やううううううううう  
やううううううううう  
帝をほへ若をあーの歎

三ツ  
鶴のとみ原宿の龍田川山を時もてすすむ木の音  
涼やかあこえさる風

月経と益々仙境に入

幻と松灯竹や見るのん

まきやか見て松と木を傳

あともよばはれお門を

衣を肩よりお仕合

ほりと白雲葉を舞せう

秋風起て吹くうち棒

東道と月のさすへ急

尾と引すりて森の木

沙汰別花の若木

つゝとふそそがり

掛けた二つのふそがり

うちやく候きそのかで

雪原と伊ちのゆ松と古

ふみ石九十九十九

山行と歌じうひをひ

音楽ふみかへやせ

ねおとおの西をうめつ

葉のぬけ古を浴びぬす

左國の下宿一里やあるん

お難すとお帰りゆき

秋の森を大入を拵ひすめ

格の木のぬく月とあつて

思ひ満は考のあきと遅

富傳眼とくとくとくと

花傳うやかくきをああ

あらじとてこうとく

追利のぬい裳ぬけと本

渡模渡模やは思つてん

ふみの子育と服とわざと

おつねいの九くく

お重比花郭公をぬれ

ゆすとみかゑとおまわ

ねは冬を捕や古御のうきり 信徳

作くやくと百倍のま

峰と雪うのに子難とぬ

信草

ふ人力のあやうさと  
驚つひむうに因れずすくら  
あらとほか神うれす  
墨の繁茂のや森のうちひそ  
尾がり袖うなぎひまくあ  
おもんじうあるゆのまよせ  
支ハ山伏海士ぬひや  
一念の辯と見てせすみ  
かたちへ鬼の大袖ひと  
我より修業の事うより  
神のへうきとえー御ゆ  
涙を二枚の裂ひやくし  
医ふくまわのらんとく  
骨しきき身ひまくぬに  
立物ひとりよやけの事  
丈方身やねまく医事が醫  
本源さくまの織繡うり  
花やめゆさき織部をわざ  
道りつゝてあれゆく  
てほな傳令あてゆうる

勘あゆす二月中由  
船也取ア後武儀すん  
八万達至終古ひが  
移作や十方を界うれす  
凡ハのうへ赤たう  
河すら炮殊賣れ志の秋  
こほもぬすに枝てゆく内  
約とめて少佐あくく雪寄  
高波う小弓の体の一  
其里へ石すのえうひ  
孤子の波木代魚のまき  
去用あれ山へ甜地のまが  
谷あたえて豪勢のじ  
豪也お重井園と枝折る  
吹きとれく墨涂の月  
秋の豪勢の豪也とくね  
まの虫殺虫寄たゞ  
燕子を走てもくまえで  
主業平々漁人やあき  
木城色比翁志望す事一時

りんちく社の社をさる  
坐まゆて寺方村の主は家  
ねねの浦はお店の寧  
めう捕ふ穂のいとをうなぐ  
平日向むらむくは君御  
夜あらん院のゑの浦は  
又大臣は重つます是  
三毛きや十二ひとの間  
波れかおりま山の月  
小舟船のあざられま宿は  
久後の七福びとくせ景  
國のもの拂ふあらうま客  
大付の景とく出ゆくん  
かと位後子と連ふまに  
貞の弟や竹おとぎ  
かくちく難波の橋は足  
黄えう母おのまのま  
そ舞のとう陶のめどりと  
温泉きくらす橋のわろ  
約のふかはるの傳子のま

志のやこうと林のう木うり  
買がりまき海の海をとれせ  
ゆう大あせうのゆー一  
松葉木の木四郎とまよがゆう  
地樹やうやま祐やすうや  
小祐ゆき板の枝ばたとひまと  
城主は日乾梅子屋野王  
木子孫木てゆうと林房  
岩戸ノじくとて傳波の店  
被れえよ一とく守と守良  
抗のかもる六月の月  
秋やじく二代目はば御堂  
まうの吸草あくと金秀  
石のねは繕うれきうとく  
身一たの嚴人幸甘草  
枝子へこけて足のひもつて  
良吉下やとしの萩じよ  
本あくとんの唐をあひます  
酒桶玉門寺のとおもとまで

さとあ鄰

情以ハ人を定ム  
おうすよせれて季モ  
量キ多ミて事の数教接  
君こしれのえんわくひぬ  
志げすてたまくと  
志筋ノ肉親ニテシテ樂  
乳セシムに思ウの精  
庖瘡の神鬼神アリトモ害  
ナリトモ而シ浅葉の高  
而シ布れた糞をじるミ  
ねちへく代の事後カホツ  
ハ降の宿と名シテルハ  
うけれとけりて一ノモモ  
大雷ナリと語りしん  
言葉おとす所ヒホ  
江戸城主延喜の木の時ニヤ  
浮白をもはとうの事  
うけれとけりて一ノモモ  
され於津福清小島ハ妻の代  
うすとれとれと外人れ作曲

萬み西岐山すうまくと  
かくノケの跡のそいのむけと  
すううおと渡ヒ芭ヒ舟  
乃よみをくらひ舟あうち  
五日は三日一き月二日多  
おとせあすれ重の秋  
沙うけりのお取のすと度  
與ひのきりああがとうと  
本務うやめなまのりあは  
門はくしとなくおゆ  
縫因度退むきとたがひ  
二人の若才浪人小姓  
サトモイちまれとよひ立  
浪ききへく丈金の圓  
海浦は地獄の夢<sup>シカモ</sup>立  
張松鶴のあひとゆく  
海の月は歩歩の津詠歌  
陽の内俊お富太郎

眉と重袖つまづく花色

せぬよしのを箇やおう  
絹は底へひのけよまきと  
の川原ふと野地の山  
山あけに移進あてねのす  
三十ニ年秋たゞ鹿  
百姓や後成ゆのかうを  
すきはゆふ修引資家  
いろは頬枯立ふもあう  
すきはゆふ修引資家  
かうを修補し時而深秋  
新じくと七月のまね  
せんやさのあまう修引  
き早ちまきむだ喰鳴れや  
まくいふの女徳のめぐら  
徳きとくくいふとく次に  
恩鬼と氣て姿ハモミ  
西ニク出直れどもがう  
とうにそまくとれどもがう  
あが池東處山れ大やしき  
ひのさうつて所ゆきよ

まう根の聲ゆひしくやい  
落基よ歩るが聲うこひす  
達づくと風くひの桂峰  
老きうめこ西のタノ延  
志の去すやお海やお幸み  
弗能や使ひゆま  
心やコ山林竹木路きり  
末連の旅苦提す秋す  
十才の和齒のくす秋す  
活地へうくうき涙やまき  
達の旅愁の店の旅  
こくくいのくも暖簾のま  
恋の圓あふかほくと人おひ  
首くけの思ひ情でよ  
うきやハト集もれで驥くと  
あくのまくい赤汗がま  
あ多ひか太慈院のまおお  
駢す傍と山丘入の山  
善充うこする花のまき  
かくすのくや左迎あん

そよ月 構の移りとて  
すりふり、彦皆成佛  
凡性の眼のえう湯の鉢  
緑檀のえう因果するも  
あらやまめかひのれのれ  
あきのとくと十貫日経  
大ハやありひのれのれ  
因縁とめーて冬月の高  
山在の柿柿工庵うけ  
青葉の圓白羽おきくせ  
青葉工本室うみやあま  
よそじあらへに不急青  
山うくゆ舟便うあまし  
海万のうすう静石う祇  
白あへ花の屋敷のは傳う  
兜引申工約いと一基  
然坂もかち子みり建て  
山すくしや二重のか卯今  
算もれもれもれもれもれ  
ねや萬々深浅とく

をめの趣の芭蕉繁玉六爻  
楚雲のかごとく横町の秋  
部幹の里れれを目めて  
よくじおうへ食ふぞ出る  
みちうり十万倍す轍の先  
あかうと先のち民菩薩  
音楽の小弓三味猿あいの山  
四竹さへく佛のめが  
肺癆く肺仰は丘尾のよ  
汲家をきくの佛そぞり  
鰐く井戸水代膚を手やれ  
小拂みうきは革拂ひり  
拂拂拂くとてやきくそん  
箇て彼のちきう虎ひと  
もあきこほくしけのと拂  
走理の善れうととおく  
まや花白束とう焼等と  
あらう拂う羽帛のた  
譽

まことありて是れ先手も  
手合ぬきゆきがれやれすん  
拙者名すへやの蔵お  
お夜の作用もゆくはるの  
はあさこやしてあわすに  
薺酒のほをゆふ用すそ  
更て是はし小夜のあ  
少耳やそよ鳴らすを教書  
翁波の芦へ伊おれすむ  
年まきのあきよきをかね  
かとせ小おや初よこほう  
物語よやからぬゑあ  
千穂四五ねこれ一ま轡  
寺の原りおひゆをまつづ  
みくまこうろ道て肩つく  
椎打のうつまたゆをまつづ  
あう聲つゝ津瀬の留  
宿つきのゆすれやむれ  
モ一体アヘセミやの月  
花のひうえ移とゆすを書

前やまうけの雪の山次  
二度川をあまみ葉柳  
絶浦とう粉雪霜ゆく  
冷多く梅枝百千別さん  
妙す所桜の枝はうつあ  
改ふの喜葉もやか待蓮が  
虎生の枝をすくらや  
日のあま高田重春はる  
かく風流む闇へゆき筆  
小蘭園は大地のうみ萬葉  
秋の飯桔風とあじゆ  
一二枝添ひくままで  
菴を筆めひそきんと  
胸算用のすきみや  
持廻もすの秋ははかく  
秋もあまくはの算ち  
ゆもせと石磯急飛する  
古の浪舟の筆原より  
陸うせんそひそくおきて

支那の風景  
今日うち到着と申まく  
船をあへてのおりのおりとや  
所の宿の二階に追ひて  
ねそとゆく船の目の高  
月船や夜の瀧船と見らん  
源元ところもうつる見る  
法のあらぬふらはれをみて  
名曲は后もつらゆく  
上下の載せあらふすを  
百秀石の船をほのかり  
さう舟をは帝の御舟  
宇隨船の哥の採集  
掛毛も小舟うすとひそみ  
えどおもねの枝を盡すを  
小舟めじらしくてのぞき  
ふる入をへさせりうる  
波音や波音すくふの秋  
さる葉人うとの聲れき  
絶草れきよやと見ゆう

これも舟歌のうら金網ある  
船の走るからうとやる帆  
帆の走る帆あるまね  
二舟ふち裏と見て立船と  
三笠山と引くうりつ  
幕代の古着置くこぼる  
雙丸あられの羽衣  
因子の箇浦うちとて夏は実  
不そ尾てゆきゆきあれ船舟  
おへあ入日とほすうしろ城  
松の根まくと在れ船と  
浦とや船の歌を云は  
舟渡の歌うこすだの歌  
白いさくらを歌う白舟  
舟渡者一や二百張く縫て  
はあへさくらめて大久山  
やかのなありやぶるふりし

幽灵と来て幽鬼の小ぬす  
や絶えの橋のよきしきを  
那今其勢万日まゆて  
祖父母もおき老とも  
被とつきあ誰志免とく  
末信はと詠く扇より  
木貸北夕能う三郎  
章詔天も青い体の子姫御  
出でわせとせひる川舟  
ミテとむ追きぬを波角  
物の旅遊ますとけ后  
本達みの尾山の端の空  
人形の紙のトトロの面に  
もとけよからずせ詰滿き  
此君事をすすと度を  
後一泊白砂うの湯  
津海宿がひよ紀の度を  
伴代以東出入の裏

轡

萬の山能詠すさんすり  
さうとうつ坐もじ時の空  
さやさんすまきぬの袖を  
けんやくめぬむのとけき  
あてうなずはる方をす  
うて他のやまとひて拂き  
あたて筆は筆ふ月をす  
趣向くらふ松の静亭  
いづれの風露こうえも秋風  
真う大用しこのの袖衣  
うつぼうよしめ山の空  
まかうひとよぎりく  
ねねは本の弓の鹿をまされ  
羨慕袖きこり一村扇の空  
クゆりはひきゆす意を  
想のすりく山の端の空  
富をむすびの爲築うきびて  
相手を本の弓をうち御車  
船のあたのりうすみや家  
打ま六外こけても月

言里のあらうとせすを花蓋て  
志が山のまふいこかくの  
さすあみやニ前うねまき今う  
ゆうすはふあー原のま  
ある後小池のまよる石一ツ  
玉子のあやうらうててぬ  
ぬけたのよしんが草むら  
上碧荷下を下に松林  
付くのめどひかるの望水  
新移うへのうれひてや  
老やよふをゆれへ町人あり  
松ハミトリヨリハ石移  
古壁ニ枝鳥と川お露  
火神をえやくもあつて  
うの御みうねどりの源  
の豪子のほと秋とちひ  
テテ新きけりそよぐは春  
地獄のうへきよもゆくち  
飛呑みうへてうえどう  
熊くわ鳥はむのよし

弓鶴とう詫事とひき手ん  
龜ハチカモトヤシテアレ  
志が山の後折枝へのゆはす  
白むくとて蘿葉五十石  
田木も活とくひてなひ夏  
ぬるひ善能も夏の秋を  
底ハ海於解人の室の月  
虎の毛こうもわかれかく房  
くうきの風也の扇せきを  
手りえゆる秦の山くも  
まけ盡じり乾坤のあ  
潔度の空蓮輪院とぞせん  
奈方天不競さくくふ  
事はくみ縁縁りのま  
うの歌の不二ア里の山  
かくも層たすくとくとて  
天とく成件をきくとての思  
難の御舟をりとれの月  
竜田のむ葉豆磨四五丁

むの御内事をくらひの二三事  
人の愁いをよくなり  
大内事をぬりあふ事無  
やうへるをもとめ松山  
時年橋はんをもとめ高麗  
方へ入せらる候事の爲  
かつみの御拂手の事  
邊もとつてきもあり  
源はくおめあはすのかに  
ゆうてねえすててくわん  
木稀はく尋もとめ高麗  
油万代をとめつゝまて  
お伊伊お白粉とくわす  
雪家の秋は種の御ゆく  
かみうし内侍あとく月  
のくまんけとくわの房  
衣原も取る御勅の御物  
かひの御脚をあひよ  
岩橋やとくまけとくま  
えりつゝあくねのつもう

その御内事をくらひの二三事  
日備の札工藝萬はくわす  
猪口郡都委事もとへーと  
慈由とくさう宋の事  
人とくそ思つまんや親の事  
死すとくさう宋の事  
死すとくさう宋の事  
いきのれひの文書の事すと  
章紙はくとく謫アズ  
おう御前才内事をす  
さくさくとく二象廢萬  
高見御謀をうすむひぢうり  
ほくへいすく機の事  
上とく行者ま西すとく切正  
大抵の傳とくらう御事  
終承はく草と續通す  
南學のき葉治本近の附  
紫北端をくほくじて  
とくう矢二筋すまう先  
軍へ追と勝をとりみ合  
そむけ何百きくしたの事

は持てはせむと嘆つて  
きくや世人百姓、  
事の難い者をすくせん  
那時方すくやの時をのび  
招神をあ等はすうそろも  
むうをとどめた男がうる  
勝のじしきをとらぬの月  
丸たまゆく河東の山  
五すほとよれとがま重行  
ひとみゆうりゆう徑のね  
深浦あはれかわゆをもそ  
友よつくりせうひ寺を  
まほのすく白毫の様に光  
大萬象を移して遠て遙づ  
寺宿やすくもどるあひぬ  
夜は秋うにたゞのをとよ  
吉祥天やこれらは脣  
ひづくの瑞階うる山から

松の向くへれひく身み  
大風の聲こゑをかくうらく  
かすみくもろき天空のきぬ  
二鈴の音おと貞女じゆめとく  
仰進退を別べつる味あじを  
脇わきの筋すじをう通とおひきれ里さと  
うみゆうは石いし印いんをくらうそ  
地じの石いし印いんをくらうそ  
木の松山まつさん葉は使つかけ水  
ふ契ふきの酒さけあかやむ古いそてぬの隅すみ  
をほきしてたゞくまくも  
たまゆうかくまゆうかくも  
あ飛と山さんをくへ一枯かく骨こ  
すくやうこゑ聲こゑの酒さけを  
ふ里さととうけくまゆまゆのゆれの辻つじ  
あの母おやのれをとれの辻つじ  
あんまだ町まちく門もんく手て考かう  
が惣そうのむ猿さるや猿さるのま  
人ひとはよ起あがくみ起あがく  
者ものだよとだま起あがくて筋すじ

旅宿の小路へひきをれ  
道とくとすあまえありの元  
上野トをめ吹けまよせ  
浮ひ毛きのれゆきおとれ  
ゆゆくやせとおとねをすき  
ゆくとせたる者もん数の月  
太き盡きを就く取立て  
云後の旅へののれ路ハ此  
とも車二万そろふむうな  
ひ山山の隠れ神ふと  
石二の轍跡をくむを剥む  
人穴やきもや桶の座  
海殻や三角の波の底す  
山根つや於椒あると  
小林やさうとくひ引き  
基やうとト女のよひす  
まも海の二郎は身を差す  
かくこそ初立る波の松  
とあやを木の橋すつと

神國法沙若丸せとれ  
思つてとせまきや後ん  
こくすらのまく眼が眉  
糞穢と一筋うそぬ松葉  
多くん傷をとめのよみ  
一束つ枝の聲やとけん  
と絆もとせよとくとくと  
思はれ多うとくとくとく  
時雨降並びうるる雨  
詫されらまくとくとくと  
君とふりみの二本の木の素  
見すくとくとくとくとくと  
河内のかずかの船石  
四重堂の舟をも浦を  
浪ア芦垣はつうち  
時を記入のをめ中ゆ  
やまし一派松よ後すた  
ゆくとくとくとくとくと

セリニレ、く入れのうひ  
蒸褐ニサノの音も吸わて  
音、さをく、聲、やみのうち承  
陪れ九月も、八月より  
設立の事、置合所、  
既テ詰めをゆへあひ、  
白露庭へ陽季も、持て  
つゝと向すたまは、猿山  
ヨリ入る金ハ小笠の山方、  
思ふ船の物、あふよ、元  
河すふね、船のあきらか  
古文、ま、交、ま、つ、秋  
海の音たまけ、おとて白露、  
を船たま、や人のよきや  
船のうなれ、の木太國屋  
江とひうえて、承、あよ、  
舟と、のよどづぬれり、  
花かきうご林の里六十間子

## 日坂とめ翁の碑

ま

六月一日東武於小石川廻り  
浦、さう瀧、くさうり水、ま、  
ま、瀧、そと、ア、ス、船、  
船のまこと、翁崎、あらじて、岸、  
酒店の秋、と、傳、る、所、に、其、角、  
翁、作、く、我、あ、く、く、コ、舟、  
うちの、た、今、人、手、使、る、あ、  
緒、と、祀、あ、祭、の、や、す、ひ、の、緒、  
を、と、す、お、良、い、を、と、な、さ、り、  
あ、き、ま、く、と、う、ち、や、う、り、を、  
大、島、の、山、ト、小、島、の、静、か、  
翁、祭、も、て、あ、も、又、の、二、  
不、教、く、う、す、れ、月、夜、の、翁、  
舟、ト、あ、く、い、の、ち、あ、き、ま、  
雨、を、あ、つ、放、せ、く、い、  
子、鹿、酒、色、も、友、と、十、年、  
既、や、る、基、と、人、あ、ま、む、を、

宿居ちくお取とよむら  
晚霜秋千そらのくは月見  
津波邊せん宿うしむ秋  
桂の葉の便さすす葉  
うしろえせまみ端端  
花舟を五日の風に降り  
か京をまき丸山の東  
三月の船よ小船み舟桂の弓  
もや萬ねとゆひびく  
哉田の我ひをとえやむ  
遊水やまとむぬすのふ  
向をめもすり酒三毛十晉  
支辞醒の恩ふよ嘆へて  
流のすみうてを覺に  
う思やの序と二相う  
旅送り些細の尼と指む  
きぬの衣着きみ度  
ひあれらうれ人のまくや  
古梵のせうたを四年む  
ひじれを送る方小舟を金

引板を業とすとのこゆく  
武すのものすとすとさ鐵ひ  
七里は尋の七星村  
里この雷南れどと化  
榜は小舟もく孫もく  
法仰卦の因をと修の板壁  
程をまよふ筋あとす  
情もよがへるをのわす  
軽く鳴ふ虫羽の紳  
空のとよあらわすあま道  
板くあじてつのの夜幕  
霜井は第上起跡と今登  
三里もすゑす不二す  
若とよすうがるすとす  
裏と熟ふる小の海日  
陽をかすと極ほく狭うき  
底水きよむる五郎入を  
拂り立上戸を渡りがと  
きうちくとれあはれ義  
伊藤すれぬ柳の歌ひさり

入院てん翁の長ふ歎と家  
一陽を齋正月をやうす  
汝機よえりゆくはすや  
深處のゆきへれとむか  
志のつみ難難りたひ  
うれやまと川峰をくらめ  
名をゆめとくしてゆくも  
店は月あす入尉學の兜  
そりそりき玉象の繁榮  
みのものわがつくれとむか  
忠子死する際すいむ  
御きの石凸凹ふく  
小女郎さんう大根東は  
血まごく起居すすいむ  
足よりの妙の門に西むき  
序のうけ放さくかの新道  
汗源うらし情す  
もくすれ詔書をまき  
あうとさとく小秋の中山  
枝葉繁茂する月のあひて

ぬこく人仰ううめ  
游とく清涼する舟のまよ  
立ゆうやのゆうとくうど  
きたたま乳ぐる織、室や龜  
麻あせ度えほときひ併  
わて薦やさす空旅船で  
文修ニ季のちくうをす  
みれ變僕くじと仰ん  
除うからくこくうつて  
二日月の新霞たまひで  
教へりのまくあけの林  
焼心とくへいりあく火幕  
特びうきまくらうう方書  
宅あくろくは接むをされ  
往くがむとくとくもうり  
桶の輪入の役居つて  
ひこまを種まくうんを  
游を惜ぬ不動をき  
寺あくとくうううううう

物の日不絶て四方静あり  
花源へあと遇と人やさん  
さうのゆはき圖

蓬

蓬池の中ふ藻花がすすり  
えやりしろくをゆくちた子  
さうあやみとよすをよめ  
肝のつゝく月の大きさ  
近草木とづけ人の通るほと  
康す小さの島はさき  
ま枝かく煙へやくともと  
機とれぬのやせよもとと  
古ちれぬさきく折れ  
めしちきく益人の書  
候うり面へあめりて築ねり  
るれおとす舟のせはぎよ  
次ナのをな給すほく小暮を  
登る  
葉ゆひらぬる若子ちひさ  
蓬生の植ねよ機とせうけて

蓬

歯ぬけの歯又のまねと  
足治よ未れとれて坐く  
つむけの舟と車の月  
歎のゆ橋れつるるそ  
そとすと云て居かくす  
花きうえうと山と雪と  
併のめくふ待うすむ  
二き様り冠あじてと重  
歎ゆけし難こタロマヌキ  
みとく取る外の指代様を  
年と波ふ清あやうくを  
歎落とくり行とせ廻る波  
を片づく時うがくはけあら  
うえちさくと大いにせす  
參うかじむる構はうとき  
終とあはれ捕らてくわせり  
衣若く人浦へゆきまわ  
子祝和音付歌ひどく

蓬

すまの月はすまむれを  
ひ黒のねむるあめさしと  
春子密林をおおてあく  
あめ川人の波をほれを  
ほれの降り人神せとさき  
さとうに此所山をやり崩し  
まのういするねうときう  
おみひあき神をまかうる  
はやあうてまつる又橋  
云産おと桜波千葉菖蒲  
ゆひきのまけうつ  
河くらうこまくら人の衣ひ  
序隔子ゆく月の夜けき  
本物よ後ちう應の箇被  
脇絆どつじふれの事

## 密柑色

ねゆと粉海とさすね葉と  
月もかくしく石垣の上  
町の門たりての葉と冬

若てん派の緋を引す 霊  
廿日ともおひこすよりうりと 暄然  
こは山うつて子供すつ 畠  
樂おもと身辱死されを 華  
床て天立とことくと別考  
ウチ櫻花の聲とすおだて 芝  
喧嘩れゆとせばぶりのけ  
は金と矢橋の舟とのあい  
ひわけと儀のゆかれゆつ  
せうくとほまと寛てつきを  
大工屋根の帰る道  
用のあらぬうけと蔽浦  
の源日代名をかくやう  
きの裏を正直すと向れ  
親とひまをすくらへく秋  
舟船よ又うくすまゑひ  
かくと簾をのほのひやか  
波花よ毎年歌すをと  
陽年をみてつまき櫻樹  
書とおたぐめの緋をとて

足利のあさみす子供の名  
色揚の門のそりへてくま  
一里の舟も後のすき  
山の密林の木の草は  
日あ終てくるかたる  
母方ままれて月のれ拂  
山の密林の木の草は  
舟の葉はと海へあむ  
されゆすはと海へあむ  
舟の葉はと海へあむ  
小食とむらひ食は下の算  
せんとうのゆふと死うゆ  
あう死ゆふと死うゆ  
もすはと海の雪小ゆ  
御す今はすまむめ努  
か減れ葉もすむと  
おれどすとれどすと  
二月の雪のゆくと厄の業  
船夕の葉のゆくと厄の業  
御に次がくとまのゆくと  
祐すせすかどるととよき捕野

月足工の川も送船せと  
駕もゆくとすす林の風  
淡の小あとらうきりと  
船うたうととくとくとく  
へうきれ舟は白豆扇  
雪原の草うり雪く花の枝  
根垂つひうとくのね

芳 菩 菩 菩 菩 菩 菩 菩 菩 菩 菩

ぬ縁ゆくとややけ葉  
とくれよすじゆくと  
月ととくとくとくとくと  
子ねかじりとくとくとくと  
松ゆくとくとくとくとくと  
雪うりとくとくとくとくと  
ト戸ゆくとくとくとくと  
日とくとくとくとくとくと  
ウの古き煙立ちまく  
立れ松の木かくとくと  
暖煙小舟の香も傳わる  
良

あとすじる室裏の船  
肌のきぬ女のかわいそらう  
夜の子や絶え我づくをき  
まかうも本よりぬ此聲  
うめうようがの子すすり  
寺が位へ拂れども四年  
朝あきゆく計のあきう  
寺が位へ拂れども四年  
おとする室裏の壁のき  
むうを寺月はゆら  
おとする室裏の壁のき  
離賣のあひり  
據の頃や赤き被ふね  
そよごとくを被ふね  
じき寺月はゆら  
そよごとくを被ふね  
志うかみくつするの意  
妙枝の機代室せんかえ  
病ひの志てゆりくかえ  
てのむじくいじるの花

らなが生氣枝の声達子  
佛きよ心を抜き放被透  
うみきよ五とまへおきあ  
入山のそよと音とま廢  
あうきよき植の是病  
岩さす弱たき折一ツ  
甲ハ無れ才かく折て  
進剥の始とく秋の書  
月水起卧も食の承  
坐と歌と基とてアモリテ  
翠巣小二ノカクモリテ  
引立て内と序とお便  
汗ハモ遠ヨ被すね  
御は「あも」於あつけ  
モ生人詩文尼の恩師  
勝り移へやむるも雪  
和紅と萬葉論と詩集  
酒ういさめう扇れ山以

空やきをすきゆく義肩  
タアと化る指の意の身の  
脣ひんをまほもあらぬて  
かう牡丹のふと度めう  
然く上方まると火上する  
かみほの荷物とひ董江  
初かみあまに猪監と箋  
の鶴すてより鷺苑  
おとせとひすは連瀧の仔  
伊勢のあすれ素波をあさき  
かたの首を拂ひ古川  
お人ハ昇のむくとくとも  
鰐江門流をすらうりあ  
造りゆまとまの酒も甘ひ不  
月もあらのうなまきゆ  
殊うや海の穂妻の生薬  
かみゆうへ手注の芭蕉葉  
そゆくの宋詩を讀む

やうへうら停歌の至  
此む三歌とのやうとも  
肩ひねめす修めさうし  
猪う雪留等小人せむ里がれ  
さかれて大の船を逃る  
華乳うもくらうすのをう  
女、嘆すら昨戸の内  
役のいのくは餘と覺ゆそ  
寝力のまくからず  
あれを旅せゆるなりけ  
多とひうえをうなじ海の魚  
のよれとあくも岸へ貨  
あくもうろくや勝う巣  
セヌモ要どかくも深き  
あくもてやくほきあく  
拂ひ本のねたまにまを拂  
飛てすきやく名やお世を  
拂ひ本のねたまにまを拂  
かくの里どつじ相や  
朝の仄陽うでまく写ん

游人と

ねへ一す山の神く  
乞食とおもをす摩薺  
絆みく途そ歸へて  
車あよわろく破れやう  
おもぬされ歌えとつ  
代は太と極あひゆる  
ゑめう来て花色大薺  
引うく萬葉の宿すをな  
因は豪拭てすゝ多幸  
月あちか一朝も美き  
きぬくおもいのきみ

## 瘦虛栗

旅人と我争ひれんくの寄  
すくゆん木と宿くよと  
勝鬪のひほときのたれ差  
狼ともぐる山椎の若櫻  
かけおもくせすはるの勝ゆう  
新らし新息月小難くや  
中の秋重工一けれども

龜

轡くしておくる摩訥 水  
神也や深まうひく波波の空 金峯  
路とまど一れ君のまね 豊  
ほのまふさとめまの野の免 繩  
卯月の雪を拂つゝも絲 鏡  
織波の神はくよりす能川  
薩一面アのくる橋松  
あまくめ里よ宿とかりあり  
月上やあん油畠の薺人  
高達とく身ひもがあうく  
おもむねとを測る佛供  
途中かたご車は薺走  
りくと厚とくに路をひた  
順は安あつたをのれのかに  
老の身の總かねはるを  
思候されしわとのまく  
四苦と子母のねをかづつ

白

令とおり人船<sup>ヨシ</sup>運<sup>カニ</sup>小<sup>カニ</sup>  
船出でて見るほんの瀬<sup>ミ</sup>ま  
かくぬ御寺<sup>ミ</sup>とたのむの  
幕や石を坂の日<sup>ヒ</sup>に<sup>リ</sup>  
小舟<sup>クモリ</sup>と見事<sup>ミ</sup>はいり  
そえのものとほ價<sup>カニ</sup>おきえ  
蓋<sup>カニ</sup>はあら面白<sup>カニ</sup>きをなす  
けじとく學<sup>カニ</sup>を教<sup>カニ</sup>え  
誠<sup>カニ</sup>がして民の天王  
仰<sup>カニ</sup>歎<sup>カニ</sup>めの事<sup>カニ</sup>事<sup>カニ</sup>  
傍<sup>カニ</sup>くろぐく櫛<sup>カニ</sup>は枝<sup>カニ</sup>  
見<sup>カニ</sup>くとみ<sup>カニ</sup>是<sup>カニ</sup>昂<sup>カニ</sup>と呼<sup>カニ</sup>  
隠<sup>カニ</sup>と西<sup>カニ</sup>やあ古<sup>カニ</sup>中<sup>カニ</sup>後<sup>カニ</sup>に<sup>リ</sup>蓋<sup>カニ</sup>  
走<sup>カニ</sup>く海<sup>カニ</sup>蓋<sup>カニ</sup>すみ<sup>リ</sup>  
益<sup>カニ</sup>き日<sup>カニ</sup>くれせの本<sup>カニ</sup>の  
走<sup>カニ</sup>きそれるまひ山<sup>カニ</sup>

おほしとき名やおねえも

おをえか新<sup>カニ</sup>つま月<sup>カニ</sup> 撫<sup>カニ</sup>  
浦<sup>カニ</sup>あさり<sup>カニ</sup>き秋<sup>カニ</sup>歌<sup>カニ</sup>る<sup>カニ</sup> 沢<sup>カニ</sup>  
の<sup>カニ</sup>の海<sup>カニ</sup>と<sup>カニ</sup>ぬる<sup>カニ</sup> 等<sup>カニ</sup>  
あ<sup>カニ</sup>あら<sup>カニ</sup>よ<sup>カニ</sup>詠<sup>カニ</sup>す<sup>カニ</sup> 蓼<sup>カニ</sup>  
や<sup>カニ</sup>よ<sup>カニ</sup>の<sup>カニ</sup>一<sup>カニ</sup>じ<sup>カニ</sup> 露<sup>カニ</sup>  
浪<sup>カニ</sup>あ<sup>カニ</sup>き<sup>カニ</sup>旅<sup>カニ</sup>あ<sup>カニ</sup>ける<sup>カニ</sup> 等<sup>カニ</sup> 露<sup>カニ</sup>  
雨<sup>カニ</sup>よ<sup>カニ</sup>露<sup>カニ</sup>の<sup>カニ</sup>虫<sup>カニ</sup>と<sup>カニ</sup>あ<sup>カニ</sup> 蓼<sup>カニ</sup>  
等<sup>カニ</sup>お<sup>カニ</sup>ね<sup>カニ</sup>お<sup>カニ</sup>れ<sup>カニ</sup>く<sup>カニ</sup>木<sup>カニ</sup>と<sup>カニ</sup> 蓼<sup>カニ</sup>  
お<sup>カニ</sup>食<sup>カニ</sup>起<sup>カニ</sup>く<sup>カニ</sup>物<sup>カニ</sup>せ<sup>カニ</sup> お<sup>カニ</sup> 蓼<sup>カニ</sup>  
等<sup>カニ</sup>お<sup>カニ</sup>じ<sup>カニ</sup>ひ<sup>カニ</sup>や<sup>カニ</sup>ま<sup>カニ</sup> お<sup>カニ</sup> 蓼<sup>カニ</sup>  
お<sup>カニ</sup>は<sup>カニ</sup>お<sup>カニ</sup>て<sup>カニ</sup>お<sup>カニ</sup>う<sup>カニ</sup> お<sup>カニ</sup> 蓼<sup>カニ</sup>  
侍<sup>カニ</sup>の<sup>カニ</sup>へ<sup>カニ</sup>き<sup>カニ</sup>丁<sup>カニ</sup>の<sup>カニ</sup>お<sup>カニ</sup> お<sup>カニ</sup> 蓼<sup>カニ</sup>  
そ<sup>カニ</sup>う<sup>カニ</sup>聲<sup>カニ</sup>智<sup>カニ</sup>の<sup>カニ</sup>末<sup>カニ</sup>の<sup>カニ</sup>母<sup>カニ</sup> お<sup>カニ</sup> 蓼<sup>カニ</sup>  
洞<sup>カニ</sup>お<sup>カニ</sup>く<sup>カニ</sup>月<sup>カニ</sup>す<sup>カニ</sup>お<sup>カニ</sup>お<sup>カニ</sup> お<sup>カニ</sup> 蓼<sup>カニ</sup>  
草<sup>カニ</sup>お<sup>カニ</sup>う<sup>カニ</sup>け<sup>カニ</sup>る<sup>カニ</sup>お<sup>カニ</sup>追<sup>カニ</sup> お<sup>カニ</sup> 蓼<sup>カニ</sup>  
草<sup>カニ</sup>お<sup>カニ</sup>ひ<sup>カニ</sup>花<sup>カニ</sup>を<sup>カニ</sup>旅<sup>カニ</sup>ひ<sup>カニ</sup> お<sup>カニ</sup> 蓼<sup>カニ</sup>

ぬも傍ら小波が葉采  
葉落種子樹の根ふんをま  
かちもくろた枝を書  
一枚とわれておむるは  
秋のあととく我肩の方  
寫あへせハ秋のあとを  
思ふトセシモテアモ  
手紙の字の底から葉落  
葉落するやうの枝葉  
手紙の字の底から葉落  
葉落するやうの枝葉  
園がて立の葉があれどり  
大ちくねおとを乗じるを  
庭どうえめの所のあく壁  
風送る波笑て浦やま  
美庭よりよかよよつよ  
おきえまたあるともおき  
岸の傍は獨りやまさん  
あとうふもかづく葉を捨て

立と名づて立と友  
掌と秋がし節と重なり  
くくくくやまきはの山

枝 良 报

寒栗詠

寒栗や粉纏けたる白の端花  
さしてうやうやしくて抱  
えまひおとく櫻と桜並  
門了が此の身のあそび  
かわも秋の日極めさんと  
七十もと懐士駒枝持  
て人画りあがめうけ  
墨跡のものととれども入  
手に處うおのととれども入  
押詠ふが乞はと信尊  
詔と詔と付て號を翁

坡 坡 坡 坡 坡 坡 坡 坡

田舎かはせぬのを待て  
芝うきつゝ月歎歌  
花の時祖父がて友をか  
傷て未よす甚はれか  
店場はまの殘廢とけじ  
もひからみたとす故所  
薦會せ招致のうる教導  
坡の経けいとじ翁先  
手をそめへ足跡れ逃げ  
渡て海のむねりもあ  
空もと枝葉のゆゑも  
移ぬもの地を翁や  
月ノれへ朝は不見れ坐忍  
うなびてあへ仰歎へりや  
仮玉刹てさくらんの持持  
仕付て序す算方の寄  
因と極びひづの縁業  
うまうめし宵の神は  
此中意氣不適意句  
多故不滿韵而終云

坡 菩 菩 菩 菩 菩 菩 菩 菩 菩 菩 菩

## 捨達

衆萬人まくぬ市井拘  
海とすも入ひひのき 舶  
舟の夷儀がひゆく徳と  
火とたく舟の星とまき  
海とくねおりつき波可  
かくふれんすき一も  
左力持る事のぬれり寄  
子の想半着よつじだ唐  
易事も友にゆゑ寄れ  
か義門のあれきのぞえ  
義若くる市井のわゆ  
勝利争おこ枝つく多言書  
牛と彩あす舟は深き  
花の日を七へのぞとびれ  
花とまもく一重の紺

船を渡者を居て舟にて  
泊のうみと絶え續を乞  
松島や雪屋の危い海を候  
心へ歸すべくとせの旅  
四の時をかゝりとせしと  
も仕ひけ御室を入て  
侍物らひもまな難苦至  
美法あや松舟の船よもじ  
あれう波の切花がけ  
月入で電流が通すとく  
の房を荷の櫻葉  
桜の下母をもじ秋の風  
邦と軍ふとれゆき  
花のかきもつ事半ばづき  
すり個とゆきと面白美を

壬生山古

御子故は給きとおおねをが  
備蓄かくもみアムする宿船

夕日こぼれ橋は寝よぢりて  
うす柿色にほる鉛波風裏  
身をそめみて立をひた虎  
うづらうけお家はゆかの  
ウ殊蓋を自利のくらふ所付て  
木の梢へ枝のちよびゆ  
つづくもき門の鷲くち  
木の梢へ枝のちよびゆ  
野すまをてこかす傷ぬ  
山体よ瘦みて身をれ配  
一里りても宿をとる旅  
うれの宿成敗をゆく  
而北舟よきりてす帰  
船風の西よ東する初日極  
ともすからむと乃づ乳  
本夜の西よ東する初日極  
あり終よぬとて面はあら海  
のれぬや萬葉うふ身難を  
榮く往ふゆきと旅をもつ

字所の枝は節とむを生る  
あるぬ山河とくもすせて  
若らうちとてゆるを誰が  
もとたのくよきうるとまゆ  
むけをと月よ浦を人もれ  
花藍はいそれとゆう井根  
おもひ切らゆう圓つねうて  
白いもと残志をうけてく  
告報り二尺のセヨニとまゆ  
絆竹と魚の櫻柿のせ 菓  
籠うる縫の小口扇をとて 良  
村の花取ふおとし敵形成得  
船支ぬの房牛の峰の月 宮波  
染をとねの音方と枝ふ 遊遊  
おもひき壁の里は葛家 家  
立あらひよちお指の籠を 箕  
三味線と歌とふやつと 童  
油うしてゆう搗のゆむら 而  
よひうの情を思ふ博士書 通

君爲すありふ極きと危 良  
船月の柱うこううの面 水  
きとや傍の柱眞思とと  
侍うめうとうとや秋の桜  
枝のうち手も夏ひだんう  
羊飼の空寂せむむのほ  
傳あけりゆときひくを  
桂の香れゆうに舟を  
歌とやとく歌のけあうき  
聲そ歌ひ空あうきは雪  
あいさううふあうりひだ  
男あひ姑うすみ歌ううと  
浪火桶う鼻代とす  
おめ舟の計のうひの舟の  
子あう修ひううきあ  
勝あう茶碗云ひ義  
ぬうみするえ持ううと  
甲坐行進舟とゆうと高は  
寄うまれてはやう初穂

